

## ■ 第2章 よい報連相（＝よい仕事の進め方）をしよう / 連絡

### ■ コラム5 知らば見えじ、見ずば知らじ

「知らば見えじ、見ずば知らじ」という言葉があります。

民芸運動の父といわれる柳宗悦（やなぎ むねよし）の言葉だそうです。虚心にものを眺めることによって、日常の中に美を見出し、美の生命を感得し、創造の糧とされたのです。

「知らば見えじ」とは、「知識経験があるので知っていると思ったら、真実が見えなくなる」という意味にとると私たちに役立ちます。

ベテランの先輩の目には、現場のいつも通りのこと、前からやっている普通のやり方に見えることでも、あなたには「どうして？」と、疑問に感じられることがあるはずです。

新鮮な目で虚心に見るとき、あなたにしか見えない現場の問題が感じられているのです。

あなたの感じたことを、上司に報告してみましょう。

なお、後半の“見ずば知らじ”は、ビジネスマン（ウーマン、とりわけ製造業）の私たちに対して、「現場、現物を自分の目で注意深く観察しないとわからない」ということを教えてくれます。

「間接的な情報、参考書、過去の経験、一般論ではことの本質はわからない」とも解釈できます。

## ■コラム6 守破離（しゅはり）

「守破離」（しゅはり）という言葉があります。

「基本を学びこれをしっかり守って自分のものにする。次に自分の工夫を加える、臨機応変の処置ができる。そして自分流のものを創る。しかし基本から離れても本（もと）を忘れてはならない」という意味です。

「守破離」は、利休百首から出た言葉です。利休百首は、和歌の形式をとりながら茶の湯の作法や心得を千利休が説いたものです。利休百首という体裁は裏千家11代玄々斎が作り上げたとされています。実際には102首あり、最後の102番が次の一首です。

「規矩（きく）作法守りつくして破るとも  
離るゝとても本（もと）を忘るな」

ここで、規矩とは、「手本、規則」を意味します。「規」はコンパス、「矩」は物差しです。

利休百首は、そのどれもが味わい深いものばかりですが、最初の5首を記します。茶の湯の道だけでなく、私たち職業人にとっても、ゆっくり噛みしめたい内容です。

「その道に入らんと思ふ心こそ 我が身ながらの師匠なりけれ」  
「ならひつゝ見てこそ習へ習はずに よしあしいふは愚かなりけり」  
「こゝろざし深き人にはいくたびも あはれみ深く奥ぞ教ふる」  
「はぢを捨て人に物とひ習ふべし 是ぞ上手の基なりける」  
「上手にはすきと器用と功積むと この三つそろふ人ぞ能くしる」

（井口海仙著 『利休百首』、懶淡交社刊より）